

第4章 上之国館跡の沿革と調査の成果

第1節 花沢館跡

1 沿革

はじめ花見岱の館といい、旧字名も「花見館」、通称「花見岱」と呼ばれている。嘉吉3年(1443)に渡道した小山隆政が拠ったところと伝わる。『新羅之記録』では、「道南十二館」の一つとされ、コシャマインの戦いで下国茂別館とともに陥落を免れた館とする。

慶長15年(1620)、花山院羽林忠長が配流となって、この館に一時滞在し、里人に読み書きを教えたとの口碑も伝わる。

大正13年(1924)、河野常吉氏は『北海道史蹟名勝天然紀念物調査報告書』に土塁の痕跡を残し旧跡歴然であるとして、「現状を毀損せざるを条件とし永く保存すべきものと認む。」との意見を付した。昭和39年には北海道の史跡として指定されることとなった。

昭和20年の始めに頂上部が耕作されたとき、太平通宝から永楽通宝を含む銅銭2,000枚、鉄鍋(釜)などが採集され、また、平成2年には背後の空壕跡付近で珠洲V～VI期のすり鉢が採集されている。

2 調査の経緯と結果【第15・16図参照】

現況では十数段の大小の平坦面からなっており、南西～北東を長軸とし、頂上後方に空壕を持つが、大型の建物が建つような大きな平坦面は少ない。

過去に調査がまったく行なわれておらず、館の構造や掘り等が不明であったため、平成10年に館跡周辺の分布調査を行い、さらに平成16～17年には内容確認のためトレンチ方式による指定地内の調査を行った。

1) 平成10年度調査

指定地に隣接する館跡東側の平坦面、西側の尾根や館跡後方の平坦面などで分布調査を行った結果、館跡東側の岩田ノ沢川を挟んだ細い尾根で、それを横断する溝や小柱穴等を確認したが、遺構の年代等は把握できなかった。一つ沢を挟んだ西の台地や掘め手空壕の後背地では、中近世の遺物はまったく検出できなかったが、西側の沢筋で段をもつ連続した削平地を確認した。

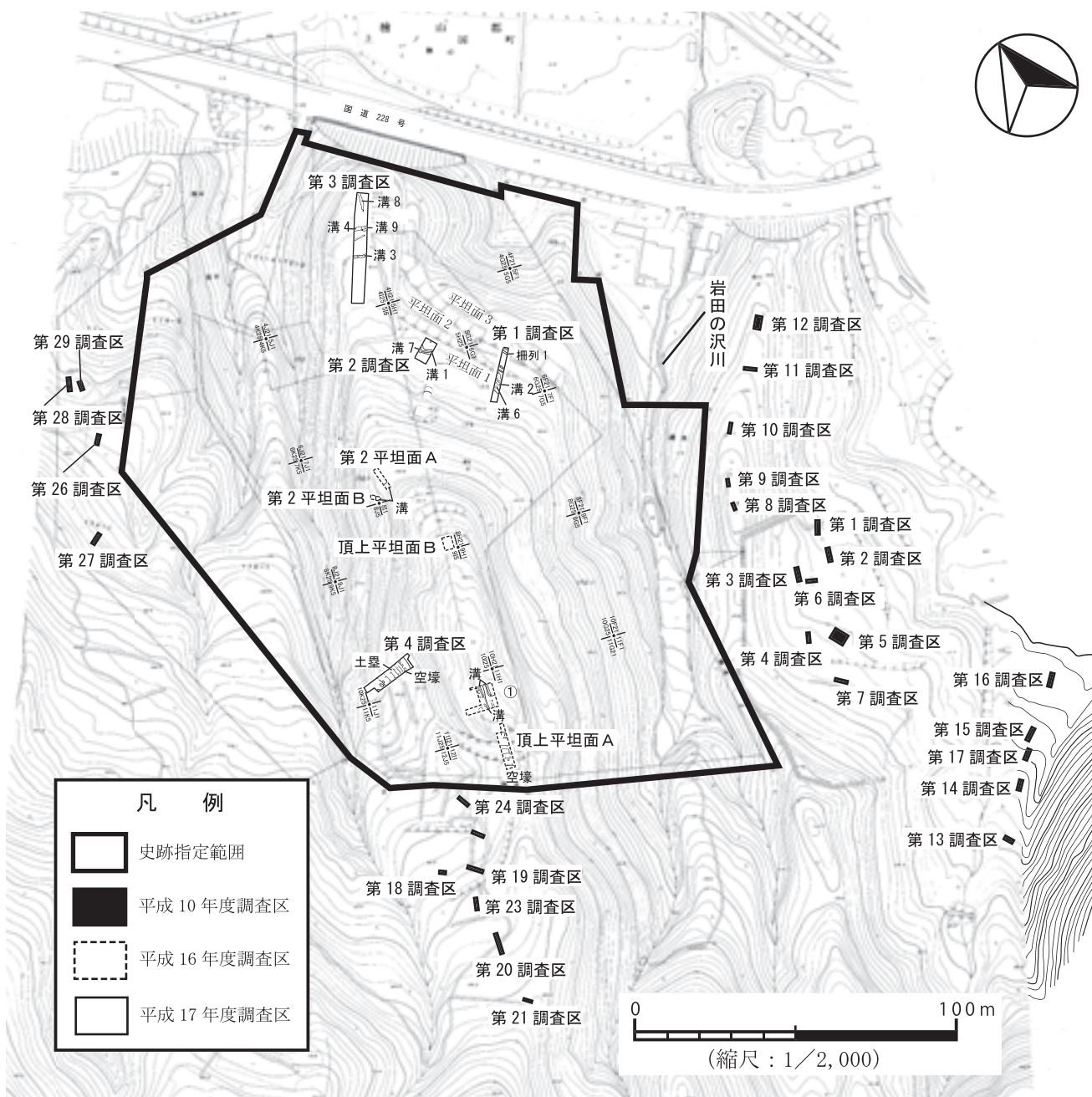
東側の岩田ノ沢川を挟んだ細い尾根や、西側の沢筋の削平地はそれぞれ見張り場のような場所と考えられ、広義の花沢館の範囲に含まれると推測されている。

2) 平成16年度調査

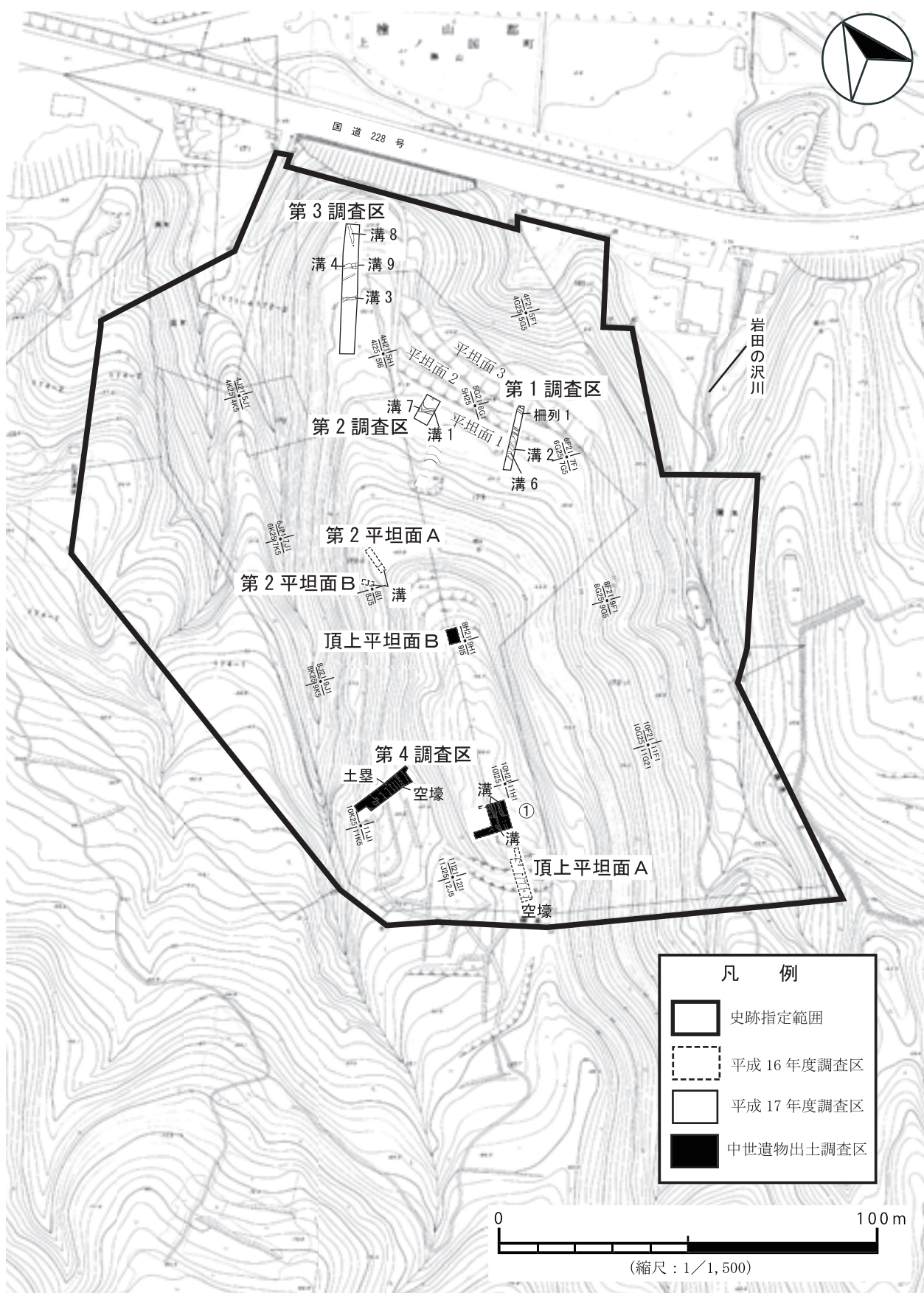
馬の背状に隆起した頂上平坦部は約1,000㎡で、その両側に溝、柱穴群を確認し、頂上部の南側斜面下に幅11m、深さ3.9m、壕底部の幅が2mの箱葉研状の空壕を確認した。頂部の北側斜面下の小平坦面の段際には、幅2m、深さ40cmの小規模な空壕を確認したが、段と同時期に築設されたことが判明している。

3) 平成17年度調査

前年度に確認された箱葉研の空壕を頂上部の西側下でも発見し、頂上部の背後を圍繞していることが判明した。頂部前面の東西に長軸を持つ平坦部650㎡で溝や柵列を確認したが、調査の結果、近現代に作り出されたもので、当時はより狭い複数の段に分かれていたことが判明した。また、北西側に張り出した段をもつ平場でも当時の柵列が確認されている。平成16、17年の2ヶ年で実施した分布調査では、龍泉窯系青磁の碗・皿・盤、白磁の丸皿、吉岡編年V期の珠洲すり鉢など15世紀中頃の年代を示す出土遺物を多く得られた。しかし、空壕跡や柵跡などは検出したものの、館主の居館跡など建物跡は検出されなかった。



第15図 史跡上之国館跡（花沢館跡） 調査区位置図



第16図 花沢館跡 遺物の分布図

3 館跡の構造と性格

室野秀文氏によれば、花沢館は構造上、山頂の主郭部分と、前面部に分けて考えることができ、後背部の尾根筋を堀切で区切り、前面には二段の腰曲輪と細い小さな空堀を配し、背後の堀切は東西両側斜面に延びて主郭部を囲郭するという。『続上ノ国村史』所載の花沢館跡復原図に、斜面下の池（湧水）を渡り、斜面を曲折して登る道が記されており、長い腰曲輪の最も下の段の西端にある大手虎口に到達している通路を読み取り、この通路跡は現在でも断続的に確認できることから、大手に向かう通路は、現在の北西側張り出し部の山道ではなく、東側の張り出し部の斜面からであったとした。大手の虎口は現状でも平場を切り込んだ様な低みとなってよく残されており、北西側の張り出しから強力な横矢（側射）が掛かる位置関係になっていて、自然の起伏を巧みに取り入れたプランであるという。

また、館後方の空壕外側の土塁状の高まりの切断箇所を通過して、空壕に降りて若干西側に回り込みながら、主郭に至る通路を確認し、頂上部に上り切るところは切り込まれているので、搦め手の虎口であったと考えられている⁽⁴⁰⁾。

全体的に大型の建物がたつ大きな平坦面は少なく、頂上部は柱穴が確認されただけであり、かつ段の多さなど他の館と比べても形状的にも差異がある。

出土遺物の珠洲のすり鉢（吉岡編年Ⅴ～Ⅵ期）や中国竜泉窯系青磁碗、切高台の白磁皿などは15世紀の中葉から後葉にかけての年代を示している。

出土遺物の分析と文献史料との照合から、花沢館は安藤政季によって守護の置かれたとされる下国茂別館や松前大館のような、広大な郭と城域をもつ守護所とは構造を異にする山城であり、存続年代は、コシャマインの戦い前後、15世紀中葉から館主の蠣崎季繁が没する寛正3年(1462)頃まで、すなわち1450年前後から1460年代、かりに年代が下がっても15世紀後半までの数十年間と考えられ、居住空間をもたないきわめて短期間の臨時的な詰城（砦）と判断するに至った。『新羅之記録』が堅固に守って陥落することがなかったとした花沢館と、現在得られている考古学的な知見とはなお隔たりがある。

第2節 洲崎館跡

1 沿革

『新羅之記録』は、長禄2年(1458)花沢の館主蠣崎季繁が安藤政季の息女を養女とし、コシャマインとの戦いに戦功あった武田信廣に嫁がせ、上国河北天河の「洲崎」の館に居いて家督と仰いだと書く。ただし、松前藩の正史ともされる『福山秘府』は始祖信廣「壘を築く」とする。

寛政元年(1789)に洲崎の旧跡を訪れた菅江真澄が「かいわけてメナの村にいづ。こゝなんむかしは、勝山の花見が館より此処に閑居の館をいとなみて、そのころすませ給ふたるむかしがたりをせり。本館より北にあたればとて、今も北村とはいへり。」(『蝦夷喧辞弁』)と書き留めた。この「閑居の館」が洲崎の館のことと考えられるが、この間、「洲崎」という地名は掻き消えたかのように記録には見えない。

昭和36年、砂館神社の南西、町道向浜線沿い砂丘の下部から、開元通宝や永楽通宝を含む銅銭約2,500枚が採集され、青磁・白磁なども出土した。同54年には神社東方120mほどの砂丘上の畑地から珠洲Ⅴ～Ⅵ期と思われるすり鉢を被った人頭骨が発見されている⁽⁴¹⁾。

同58年には神社南西の町道向浜線沿いの砂取場から大量の陶磁器と擦文土器が採集され、平成5年には館跡東方の国道228号沿いの住宅建築に伴って掘立柱建物の柱跡を確認し、15世紀頃と推される青磁一片を採集している。

2 調査の経緯と結果【第17・18・19図参照】

館の規模や構造（縄張り）把握のため平成11～13年の3ヶ年に亘って、トレンチ方式で詳細分布調査を行った。調査箇所は砂館神社境内地を中心に、周辺の砂丘上や東南の平坦部など合わせて69ヶ所に及んだ。

1) 平成11～12年度調査

『新羅之記録』に洲崎館の北側に毘沙門堂が作られたとの記述があるので、遺構を検出すべく、建立位置と目される砂館神社本殿北側の砂丘上（第32～37調査区）を調査したが、中世の遺物はおろか、近世